

Title	巻頭言：データとインターネットの東南アジア展開
Sub Title	Foreword
Author	村井, 純(Murai, Jun)
Publisher	慶應義塾大学湘南藤沢学会
Publication year	2018
Jtitle	Keio SFC journal Vol.17, No.2 (2017. ) ,p.4- 5
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 高等教育の国際展開：EBAプロジェクトの挑戦
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=0402-1702--004">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=0402-1702--004</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 巻頭言

## 特集 高等教育の国際展開～EBAプロジェクトの挑戦 「データとインターネットの東南アジア展開」

KEIO SFC JOURNAL Vol.17 No.2 特集編集委員

村井 純

慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科委員長 /  
慶應義塾大学環境情報学部教授

2016年9月、インドネシアのバンドン工科大学に於いて東南アジア地域のインターネット20周年を記念する式典が開催された。1996年SFCと奈良先端科学技術大学院大学を中心に開始した東南アジアの衛星インターネット研究開発のAI<sup>3</sup>プロジェクト<sup>[1]</sup>の最初のパートナーが同大学であり、それがインドネシアのインターネット元年として記されていることを祝ったものだった。

1980年初頭からインターネットの開発に携わって来た慶應義塾の情報工学分野は、世界的に見ても先導的な役割を果たしてきた。理工学部(当時工学部)の矢上キャンパスには、電気工学科と数理工学科の連携で開発したハードとソフトを用いた自家製のローカルエリアネットワーク(工学部の英語名 Science and Technology に因んで S&Tnet と命名された)が誕生した。その後、電話回線を用いた全国ネットワークのJUNET、さらに、本格的なインターネットの開発と運用など、常に慶應義塾はパイオニアとしての役割を果たしてきた。インターネットが世界的に展開した1990年代にさまざまな研究課題が国境を超えて展開し始めた。インターネットを前提としたキャンパス環境を展開していたSFCでは、当時博士課程の学生だった大川恵子さんを中心にインターネット上の教育の研究グループ、School On Internet (SOI) が活動を開始した。この活動は現在のMOOC<sup>[2]</sup>につながる授業のアーカイブ化も推進したが、SOIの特徴として、リアルタイムの連結授業への挑戦も数々行った。米国Wisconsin大学との「CS640」(コンピュータネットワーク概論)の授業は、米国側が大御所Lawrence Landweber教授、SFC側を村井が担当する太平洋を超える画期的な試みであった。それぞれの学生もオンラインで交流するという授業で、その様子はニューヨーク・タイムズでも写真入りで報道された。華やかに見えたその成果ではあったが、成功裡に終了したにもかかわらず継続されることはなかった。その理由の一つはタイムゾーンである。夜と朝が逆転する時差にある両大学は授業の管理が大変で夜中に残らせるために学生

に食事を出したり、逆にアメリカの学生には早朝の授業のために朝食を用意したり、舞台裏の苦労は大きかった。

リアルタイムの授業共有が可能な時差を考えると、3時間から5時間の時差がほぼ限界で、西は中東あたり、東はハワイあたりが限界点だということになった。こうして、AI<sup>3</sup>の開始から5年後の2001年には、SOIプロジェクトの東南アジア展開であるSOI-AsiaをAI<sup>3</sup>の参加大学を中心に展開した。SOI-Asiaとともに東南アジアとの授業連携の関係は大きな変化を遂げた。授業の共有、インターンの交換など、すべての大学の教員やエンジニアが年に二回必ず集まり議論して運用を続けてきた。

AI<sup>3</sup>とSOI-Asiaの長い歴史とパートナーシップ、および同時期に活発に留学生受入を行っていたAUN/SEED-Net<sup>[3]</sup>で構築したパートナーシップを基盤に、文科省の世界展開力プログラムのASEAN部門として採択されたプロジェクトがEBA (Evidence Based Approach) である。

慶應義塾大学の学生をはじめとして、東南アジアの未来を担う学生たちは、あらゆるデータへの利用を前提に、デジタルテクノロジー、データサイエンス、そして、STEM分野の力を駆使した問題発見と解決をする力をつける必要がある。慶應義塾大学の提案は、このような環境をいち早く整備し、学生達のモビリティをワークショップ形式の自律分散協調的な学習と成長を実現することにあった。

成長する東南アジアの経済や社会を担う次の世代として、パートナー校の学生はもちろん、彼らと交流して未来を構築する日本の学生も連携し、成長ゆえの課題、複雑で困難な課題に力を合わせて取り組む環境が必要である。EBAのプロジェクトでは、デジタルデータを用いてアジアの新課題を解決し未来を創造する学生を育成するばかりでなく、戦後に成長を遂げた日本の経験を共有し、発展と成長ゆえ発生した問題の解決を議論することができた。また、そのための大学の制度整備やパートナー校との貴重な関係の構築は、関係した全ての大学にとっての貴重な財産となったと思う。EBAプロジェクトにご理解をいただき、協力をご指導をいただいた方々に心からの感謝をするとともに、本編にまとめられたEBAの成果が未来を創造する学生達に貢献することを願っている。

## 注

[1] AI<sup>3</sup> Project: Asian Internet Interconnection Initiatives Project

[2] MOOC: Massive Open Online Course

[3] AUN/SEED-Net: ASEAN University Network/Southeast Asia Engineering Education Development Network